

会 議 録

1 会議の名称

令和元年度 第6回 川根本町立学校設置適正化及び教育のあり方検討協議会 研究会

2 会議日時 令和元年7月12日（金）午後7時00分から午後9時00分まで

3 開催場所 川根本町山村開発センター 2階 大会議室

4 出席した者の氏名

研究会委員	梅澤収委員長、山下斉副委員長、鳥居進委員、鈴木憲委員、 石川泰宏委員、西澤浩美委員、松下文代委員、小澤いつ子委員、 新林章輝委員、
事務局	大橋慶士教育長、森下育昭教育総務課長、 宮島明利課長補佐兼教育総務室長兼管理主事、和田美代史指導主事 ほか 教育総務課職員2名
傍聴者	1名

5 議題

協議（報告事項）

(1) あいさつ

- ・ 大橋慶士教育長
- ・ 梅澤収委員長

(2) 協議事項

- ① 「2020年度 子供の学びが進化 よくわかる新学習指導要領」内閣府映像視聴
- ② 「教育の死の谷を脱するには」ケン・ロビンソン卿映像視聴
- ③ 令和元年度 教育のあり方検討協議会事業計画（案）について
- ④ 「これからの川根本町の教育のあり方を考える会」（仮称）の開催について
- ⑤ 質疑応答・意見交換

6 会議資料の名称

「川根本町学校設置適正化及び教育のあり方検討協議会 事業計画書（案）」（資料1）

「ケン・ロビンソン卿 紹介資料」（資料2）

「これからの川根本町の教育のあり方を考える会（仮称）（案）」（資料3）

「2019 川根本町学校教育ビジョン」（資料4）

「川根本町教育大綱」（資料5）

「川根本町学校教育ビジョン H31 エボリューション提案」（資料6）

7 発言の内容

(1) あいさつ

- ・ 大橋慶士教育長
第6回教育のあり方検討協議会研究会にお忙しい中出席いただきありがとうございます。
昨年度は研究会を5回開催させていただいた。5回の中で、これからの教育のあり方を含
めて提示をさせていただいた。今年はそれを踏まえた上である程度一定の方向が見えれば
と見え、何回か検討会を開催させていただきたいと考えている。先日、教育新聞を見てい

たら、東京都の麹町中学校に柴山文部科学大臣が訪問した際に、工藤校長が、「色々やっていることは手段であって教育の目的ではない。」と言われた。教育の目的は、これから育てる子どもの姿が目的であって、それぞれやっていることは手段であるため、目的と手段を考えてほしいと思っている。これから、川根本町として育てたい子どもの姿に対して、地域環境も含めてどういった方向に持っていったらいいかを議論していただきたい。

- ・ 梅澤収委員長

昨年度に引き続き委員長を務めさせていただきため、よろしくお願ひしたい。最後の研究会から半年ぐらいたっているが、大学の実践センター長やE S Dのプロジェクトリーダーとして、補助金事業としては終了して、せっかく作ったコンソーシアム事業ということで、静大に在籍しているあと3年間はやっていこうと思っている。今、E S D幼児教育ということで、10月18・19日にシンポジウムを予定しているため、よろしければ参加をしてほしい。全国でE S Dに加盟しているところが20もない状況の中で全部を呼んで、新しい方向性を出したいと考えているため、よろしくお願ひしたい。もう一つは、大学として、国立大学の2法人統合といった話の中で、2大学の静岡キャンパスと浜松キャンパスを分離するといった案が決定されているが、最近では、県知事や静岡市長が賛成しているといったことが嘘であったということで大騒ぎになっている。国立大学をそのようなことができるといった法律ができたが、当事者の意見も聴かずに強行されてしまったことに信頼関係が損ねられてしまっている。形を創りたいということが先行してしまい、中身で、皆がどう思っているのかを掘り起こして一緒にやっていこうといったスキームに持っていけないところが問題であると考えている。これは、学校再編といった地方創生の観点も同じで、内閣府や県がこういう方向を望んでいるからということを考えつつ、地域の人や学校の人たちがどう考えているかを伺ってやっていかなければ物事が先に進まないのではないかとと思う。そうでなければ協力が得られなくなる。そのようなところを今年度やっていきたい。最終的には住民の人たちがどう考えるかを掘り起こしてやっていきたいため、引き続きよろしくお願ひしたい。

(2) 協議事項（協議会設置要綱第4条第8項に伴い委員長が会務を総括）

委員長：まずは、内閣府等の映像を視聴いただく。

- ・ 「2020年度 子供の学びが進化 よくわかる新学習指導要領」内閣府映像視聴
- ・ 「教育の死の谷を脱するには」ケン・ロビンソン卿映像視聴

委員長：現在、文部科学省では、次の次の学習指導要領の改訂作業に取り掛かっている。テストで測って教師を評価するといったようなことがこれまでであったが、児童生徒の状況から評価が変わってしまうことに対してアメリカで裁判となり、やめる方向となっている。日本も同じようなものがあり、全国一斉学力状況調査において、小学校が国語と算数、中学校が国語と数学、今年度英語が加わり、それでもってその学校を評価して高い低い

とやっているが、確かな学力とか一人一人の子どもの成長は、その何分の一の面でしか評価していないため、ランクづけして何の意味があるのかという根本的な問題を考えずにして、これからの子ども達に勇気を与えるようなやり方なのかが問題となっている。主体的で対話的な深い学びが昨年度教師の国際調査で日本はしっかりとした取組みが出来ているといった教師が30パーセントほどで、どうやっていいかがわかっていないという課題がある。そういう学びができる教員を育成していかなければならないが、解っている者がいない状況にある。教員の養成も現場も一体となって取り組んでいかなければならない。小規模な学校のほうが工夫できるのではないかと考えている。川根本町の教育のあり方について、何が子ども達に一番いいのか、どうやったら育つのかを地域の人たちと一緒に考えて考える必要がある。秋田県に行った際に、うらやましいと言われたことが、地元には高校があることだった。なければ高校から他に出ていかなければならない。川根本町はおもしろい一つのモデルではないかと思う。

③令和元年度 教育のあり方検討協議会事業計画（案）について

事務局より資料1に沿って説明

- ・昨年度から協議会を立ち上げているが、昨年度は協議会を2回、研究会を5回開催した。今年度は一応の方向性を出したいと考えている中で、本日第6回目の研究会を開催している。7月から8月ぐらいに、第3回目の協議会を開催したい。9月ぐらいに、保護者の方や地域の方に、川根本町の教育や今後の教育の進み方等について説明するとともに、意見交換を行いたいと考えている。この意見交換等を踏まえて研究会を開催し、協議会へ報告する内容等をまとめた上で、協議会でその内容を協議し、今後の川根本町の教育の方向性を示したいと考えている。

④「これからの川根本町の教育のあり方を考える会」（仮称）の開催について

事務局より資料3に沿って説明

- ・教育長のあいさつ
- ・「「Society 5.0」という社会（あなたのところもこんな未来が）」 政府広報映像視聴、
- ・「新時代の学びを支える最先端技術のフル活用に向けて～柴山・学びの革新プラン～」(柴山文部科学大臣) 映像視聴、
- ・「2020年度 子供の学びの進化 よくわかる 新学習指導要領」内閣府映像視聴、
- ・川根本町の教育 ～人口減少地域における特色ある教育づくり～説明
- ・川根本町の教育の現状について説明
- ・川根本町の児童生徒数・学級数の推移・推計について説明
- ・質疑応答・意見交換

上記の内容で、小学校の学区単位で開催し、保護者の方や地域住民の方に出席いただきたいと考えている。

委員長：イメージとしては、教育委員会が主催となるのであまり砕けた形ではふさわしくないとと思うが、地域の人を感じている不安や不満を出してもらおうようにしないと次に繋が

らないのではないかと思います。形式的にこのようなことが大切であるというふうに言われても難しいのではないかと思います。保育園や幼稚園で子育てに係る不安など、入れてほしい内容や要望等について話をしてほしい。

委員：学習指導要領の映像を見せていただいたが、これからの教育は、とても複雑な社会情勢になっていく中で、社会的な情動スキルというか目に見えないところの意思や意欲、相手への思いやり、我慢強さなどを主に教育目標に入れていくことが分かった。ただ、幼児人口が大変少なくなっている。幼稚園などは特に以前から少数派の幼稚園なので不安に思っている。質の高い幼児教育をしたいと思っても人数が少ないと思うようにいかない。緊急な課題として考えている。来年度卒業する園児は3名だが、3名とも町外に出るようなことを聞いている。これからの町の教育のあり方を考えるということとは大事であるが、小学校を中心として開催するということだが、質の高い幼児教育が重要視されているため、幼児教育を土台とした教育のあり方について考えてほしいと思う。

委員長：子育てのケアが手厚くないと学校に来ない。子育てするのに学校があるとそこで子育てしようとするが、学校がないと他に行かなければ子供の将来が不安で出ていってしまうので、その前に、ここにいると安心して子育てができる、子育てをしたいという町づくりが重要であると思う。それには、ここで子どもを産むと援助金が出たりするようなものもあるが、子育ての仲間がいて安心して子育てができるイメージがベースにないと、学校に行く前にどこかに行ってしまうことが危惧される。福祉や子育て施策そして教育をより密接に関連させていかないと、教育でいかがですかと地域の方々に知らせても建前のような議論になってしまうと心配になった。

委員：この会に参加させていただくに当たってこれまでの資料を読んできたが、読めば読むほど複雑で、方法を考えることが難しいと感じた。今思っているのは、3年後の園児が5名で、5名のうち南部小学校に3名、中央小学校に2名となる。同じ学年でいうと、徳山聖母保育園にたしか6名で、桜保育園に9名で、転勤されるかもしれないが、その学年は特に少ないのが現実となっているため心配している。保育園の保護者の方が小学校に上がるに当たって危機感を持っているのかわからないが、この説明会に参加してもらうように声掛けをしていきたいと思う。

委員：子供が少なくなってしまうところに危機感を持っている。今年引っ越しご親御さんの考え方は、ここは子育てにはいいが、学校に上がって複式学級を心配していた。学校に行ったら人数が減っていくことが不安であるため、ここにいたい気持ちはあるが引っ越し予定でいると言っていた。幼児期の子どもがいる家庭の生の声を受け入れた上で小学校の問題などが考えられるのではないかと思います。

委員：少人数や複式学級が不安であるという保護者の方の気持ちは、確かに上がってくることで耳にはするが、実際に複式になってみて、授業参観や学校の行事での保護者の方からは、不安であったがそうでもないという意見を聴く。実際小学校の保護者の方の中でも、街のほうからこちらに越してきて、複式だけど、少人数だけどこちらに来て良かった。先生たちに教えてもらって幸せだと言ってくれている。そういう方々の声とか学校の子どもたちの様子を保育園や幼稚園の保護者の方に見てほしいと思った。

事務局：中川根南部小学校は、これまで複式学級が2学級あったものが、今年度は1学級とな

り、人数が増えている学校もある。

副委員長：中央小学校の来年度の入学者は5人となる。そうすると、再来年度2年生と3年生が複式学級となる見込みである。支援学級も減となるため、今8学級あるものが6学級となるということで、人数が変動すると学級数が変わってくる。南部小学校は人数が増えているが、中央小学校は年々人数が減ってきているため、地域によって違いもある。小学校では少人数のマイナス面は考えずに小規模校の良さを最大限に活用して教育を進めていこうとしている。教育の効果は上がっていると感じている。RG授業で町内4小学校が行う授業もかなり熟成されてきてうまく回るようになってきていると思う。4つの学校の日常は少人数でやりながら時々RG授業で大人数での授業を行っていることで、自分の学校で培ってきたことを発揮する場となっている。また、自分たちの課題を発見し、学校に戻ってもう一度学び直すようなことをしている。良いサイクルでやってきているが、それは一つの手段であって、その手段が機能している。絶対数が少なくなってくれば形が変わっていかねばならないと思っている。

委員：中学校まで来ると、どこかに行こうとかよりは小学校から同じメンバーでやってきており、親同士の間関係も良いので、反対に本川根中学校にいる良さを感じていて、仲間意識から不登校などの話題も共有していて、保護者からは中学校にいる良い面を聴くためうれしいと感じている。授業とか勉強についても町が企画してくれた手厚い面についても感謝している声も聴く。保護者の不安は進路のことと部活動のこと、これは、人数のことで仕方がないが、自分の夢をかなえるために外に下りていくことも必要であると思う。中学校生活に関してはそれほどでもない。進路に関しては子どもの夢や保護者の思いを考慮して指導していくことだが、部活動に関しては感情的な面もあるため、保護者の気持ちを聴きながら丁寧に説明し再編していく必要があると思う。今の3年生は4人だが、その3年生が卒業すると小学校から12人入学してくる。そうすると30人弱となり、活気ある中学校になると思う。現在も少ない人数の中で生き生きと一生懸命活動しているので、何が適正かわからないが頑張っている。若手の先生方も初めは川根本町で行っているRGとかの意味も分からなかったが、回数を重ねていくと理解してきている。そして川根本町色に染まって出ていく。出ていった後は色々なところで川根本町の良さを伝えてくれていると思う。幼児教育の問題について、人数が少なく出ていってしまうことが問題であると思うが、中学校としてできることは本川根中学校や中川根中学校、そして4つの小学校も良いところだと学校はPRしているが、保護者の方や児童生徒が地域の方に伝えていくことがまちづくりに繋がっていくと思う。

委員長：この頃、マスコミなどで川根本町が取り上げられることが多いが、それを見ると、川根本町が頑張っている姿が伺える。イメージを良くすることも必要であると思う。加えて、川根高校さんの県外からの入学者も6名いて、そのような取り組みが報道されるとイメージが上がっていくことも重要であると思う。

委員：基本的には本川根中学校と同じように不満があるとすると部活動の問題や進路の選択の問題ではないかと思う。他は、不安や不満を耳にすることはない。考えてみると、この実態を良しとしている方々がここに住んでいる。中学校から高校に進学をする際に出てしまうことがある。もう一つは、小規模校ならではの教育ということで、学校経営目標に、「誰もが中川根中学校で良かったと実感できる学校づくり」ということで、生徒、

保護者、地域住民そしてそこで働く教職員がそのように思える取り組みを行っている。ビデオで、新しい学習指導要領を見たが、小規模校での学習の中で、主体的で対話的な深い学びについて、対話的ってどうするのかと感じてしまう。一昨年の町全体の出生者が12名と聞いているので、それは、少ないねと感じるのか、あと6年後には川根本町4小学校に12名の入学者となるため、そうかと聞き流すのか6年後だよと危機感を持つのかを踏まえると、これから学習指導要領が変わってくる中で、主体的で対話的な深い学びをどのようにしていくかを考えて、テレビ会議システムを取り入れてやるのか、また、普段の小規模校の良さを生かして、普段鍛えたものをRGで集まって発揮する場としては良いが、一步間違えるとそれでは統合すればというような意見に繋がってしまう危険性もある。保護者に伝えるときには気を付ける必要がある。それは、小規模校の良さがベースにあって、みんなで集まって披露することが良いのであると言っていかなければならない。先ほど、幼稚園・保育園のほうから出たが、ちらしを見ると「保護者の皆様へ」という対象の保護者は誰なのか、対応の仕方、高校生の保護者や中学3年生の保護者は関心が薄い為出席しないのではないかと思う。就学前の保護者に呼びかけないと意味がないのではないかと思う。昨年度の教育のあり方検討協議会について、「学校設置適正化及び教育のあり方検討協議会」が、「これからの川根本町の教育のあり方を考える会」となっている。

委員長：自分たちの川根本町がどうなるのか、ここで子育てができるのか不安と想いを語ってもらうところとなると、確かに「保護者の皆様」となると、小学校の人たちや中学校の人たちに働きかけているような感じがある。

事務局：幼稚園や保育園の保護者の皆様へも、保育園や幼稚園を通じて呼びかけたいと考えている。会場は学区として、町内を4つのブロックに分けて開催したらいいのではないかと案である。

委員長：ブロックは小学校単位で行うが、呼びかける対象は広く行うのか。

事務局：住民の方々へも「保護者の皆様へ」の部分を「町民の皆様へ」と変えて呼びかけたいと考えている。学校の配置というより、これからの川根本町の教育を考えた上で、その教育を行うための最適な配置はどうかというような検討をしたいと考えている。まずは、これからの教育はどのような方向になっていくか、川根本町の教育の現状はどうなっているのかを理解していただく会にしながら、子育ての不安や不満等の意見を聴くような場にはできないかと考えている。

委員長：このような会を、あり方協議会研究会がやったらいいのか、それとも協議会の委員が話を伺うほうがいいのか疑問に思った。もっと言うと、子育てとかになると、町長さんとか教育長さんとか福祉関係の人も来て、「子育て・教育について」というような話を聴く場としたほうが良いかもしれないとも思った。

教育長：集まってくただの非常に難しい面もある。折を見て、家庭教育学級などでも話している。なぜこのようなことをやろうかと思ったのかは、保護者の方や地域住民の方がある一面的な情報しか得ておらず、今川根本町で行っている教育を理解されていない面があり、説明したら、そのような面もあるのだと理解された。ある一面的なことという方は、子どもが少ないので統廃合したほうが良いと言って一面しか受け入れられないようなこともある。町で行っている教育の実態を知らないため、多くの人に知ってもらうき

っかけになるのではないかと考えている。すべての人に言うのは難しいと思う。学校では理解されているが就学前の保護者の方々は理解されていないかもしれない。

委員：先ほど来話題となっている小規模校について挙げられているが、川根高校は少人数が魅力となっている。この4月に初めて県外からの入学者が6名あった。県内からの入学者が6期生となるが、県外からの6名とその他の留学生になぜ川根高校を選んだのかを聞いてみると、少人数だから、そして自然がいっぱいだから選んで来たという回答が多かった。県外からの入学者は、横浜、川崎、東京都内、埼玉、山梨、名古屋からだった。少人数といっても、保育園、幼稚園、小学校等とは人数的の意味合いが違うのではないと思う。本校は一クラス10何名とか、20何名とかで、普通高校の中では少人数となっている。10何名とかいるので対話的な指導とかという学習活動も心配することもなくやっている先生もいる。少人数とか自然とかこの地域の小学校、中学校では当たり前のようになっている。町内の中学校から入学した生徒にとっては、他地域から入学してきた生徒が、少人数授業が魅力であると言ってやると驚きもある。改めて良さを再発見する機会もあったりする。川根高校の魅力はそれ以外にもICTとか寮が整備されているし、安価でもある。そして公営塾もある。他の保護者から見るととても魅力的なところではないかと考えている。4月の入学生の半数以上が3中学校以外からの生徒で、全体の半数が留学生となっている。町からの支援も成果が出てきていると感じている。

教育長：対話的な授業とは単純な話し合い授業ではないと考えている。

委員長：アクティブラーニングとは、ただ話し合えばいいという風に誤解されるので、学習指導要領で正式になる時に、主体的で対話的な深い学びに変わった。括弧してアクティブラーニングと書いてある。本当は、ディープラーニングで深い学びに繋がらないと困るという話で、そこがポイントである。楽しく勉強していることが良いわけではなく、自分事と考えて深い学びに繋がることが必要。学びは教科を超えて関連付けて行うことが必要。

教育長：最近、学びの選択という本を読んでいたが、興味・好奇心を持つことが学びに繋がることになる。課題は同じであってもテーマはそれぞれで変えることが必要。個に応じた学びをしていくと、自ら主体的に学ぶことになる。

委員長：1950年から60年の時に、「やる気スイッチが入ればどの子も輝き出す。」という言葉を残した東井義雄という教育者がいた。自分の問題として興味を持ったものにはほっといてもやっていくが、そこにもっていくまでが教師の役割であると思うが大変難しいところである。教育の原点のところをやっていかないといけない。深い学びは形式的にあるものではないと思う。

教育長：同じ課題でも、絵で表現することが好きな子もいるし、文章が好きな子もいる。興味を持つ方法でやるのが深い学びに繋がっていくと思う。

委員長：総合的な学習みたいなものが自分事としてちゃんとやれる時間が保証されれば良いと思うが、週2時間と決まっていて、最近の方向では土日にやってもいいような考えもある。学びのイメージは、教科ごとに深めていくようなものになっている。それは違うと思う。基礎的な学びは必要なので、半分ぐらいはそれだと思うが、絵で表現するなら図工だし、文章で作文するなら国語になるし、そのような構成になってくると思う。

委員：先ほど委員長から小学校や中学校の県費負担の教職員は異動があるので深くまでは関わ

っていないようなことを言われたが、それはその通りであると思うが、教員は今、目の前の子ども達をどうするのかを考えていて、キャリア教育とかを行う中で、今の子ども達が10年後の未来にどうなっているかを想像して教育に当たっている。これから入ってくる子ども達が何人とか、条件を与えられればそのようにやっていくので、将来的な小学校の規模とかを今の教職員は考えないでいる。やはり、この学校のあり方について現職の教員に考えさせるのは難しいのではないかと思う。

委員長：その学校の地域の今後とか歴史とか今とかを考えて未来をどうしたいのかを学校の中で議論するようなことが研修のテーマとなっていて、それを基に授業をやっていく風にしていかないといけないのかなと思う。現場の先生は、目の前の子どもに全力投球することはその通りであると思うが、その全力投球の向かう先が、今やっていることが、過去と現在と未来をどうつないでいったらいいかが大きな課題であると思う。

事務局：9月くらいに予定したい「これからの川根本町の教育のあり方を考える会」（仮称）をどのようにやっていったらよろしいか。教育委員会としては、今の教育の現状を知っていただく場が必要ではないかと考えている。それをやりながら意見を聴いていきたいと思うが、なかなか思うようにはいかないのではないかと考えている。

教育長：非常に難しいと思ったのは、私が教育長に就任した当時、町政懇談会で町内30か所を回ったが、30か所回っても出席者が少なく、多くの方の意見は聴けなかった。それぞれの小中学校で保護者の方々には説明いただいているので、就学前の方やこれから子どもを持つような方々の意見を聴くために、どのように集めたらいいのか、どのような説明をしたらいいのかの意見を伺いたい。

委員長：幼稚園や保育園に行って意見を聴くのはどうか。

委員：一番難しいのは、本音を聞き出すことだと思う。集まった方々が少人数に分かれて自由に言い合う場を作ってみたらどうか

委員：この会で求めたいのは、町民の不安や不満を聴くのか。それが目的なのか。川根本町の教育を伝えるときに、川根本町に残って安心して小学校に行っても中学校に行っても大丈夫であるということを伝えるのか。

事務局：事務局としては、川根本町の教育の良さを分かっていたきたいと考えている。その質疑応答の中で、ご意見を伺うことが出来ないかと思っている。

委員長：意見交換の中で、ある一言がきっかけで色々な意見が聴けることがあるということを知っている。

教育長：今、本音という意見が出たが、ある特定の方の不安感などをあたかもみんなの意見であるかのような発言が出てくることもある。集めるのにどうするかが問題であると思う。

事務局：アンケートを取るように言われる方もいるが、アンケートも取り方によっては変な方向に行く場合もあると感じている。

委員長：話し合いをやった結果、話し合いに来た方が一緒にやっていきたいなと思っていただくことが大切。うまく会が進行して終わるよりも、その辺をどう行なうか。あまり行政が仕切ってしまうと魅力がなくなってしまう。

事務局：話を聴いていて、両方大切であることを、ご意見をいただく中で感じた。ここにあるメニューをポンと出すと教育委員会からの押し付けのように感じてしまうかもしれない。示し方が大切で、考える会ではなく、今やっている取組についてご意見を聴かせてほし

いというようなスタンスで投げかけると、知らないことを知って会に参加してよかったという満足感が評価の指標になると思うので、中身を工夫して、出すメニューも工夫する中で、地域の皆さんや保護者の皆さんのご意見を伺って、これからの教育を創っていただけるような会に持っていけるように検討する。教育大綱を資料として付けているが、0歳から18歳までをうたっている中で、少子化が止まらない原因を福祉とかと話して見つめ直す必要があると思うので、会がそのきっかけとなるようにしたい。小学校、中学校が私たちの所管であるため、先生方の頑張りで子どもが育っている姿を何らかの形で見ていただくような場所になればと思う。

委員長：今後も継続して協議をいただきたい思っている。今日はここで閉会とする。お疲れ様でした。

午後9時00分閉会